

ハーツホーンの宗教哲学

大塚 稔

Hartshone's Theology

Minoru OTSUKA

I 神学と数学

ハーツホーン、は一九四三年に、「有神論の数学」という論文を発表している。神学と数学とを結びつけたこの論文は、宗教評論 (Review of Religion) 第八号に掲載された。その十年後、それは、『哲学者たちの神』("Philosophers Speak of God")のエピローグに「万有在神論の論理」と改題、修正され、再び発表された。この拙論では、改題、修正された「万有在神論の論理」を主な典拠にして、ハーツホーンの宗教思想と論理との関わりを考えることにしたい。

「万有在神論の論理」が収められている『哲学者たちの神』は、原典抜粋に、解説と解釈が加えられたものである。これは、リーズ (William L. Reese) との共著だが、序文とエピローグを含むコメンタリーの大半は、ハーツホーンによって書かれた。取り上げられた哲学者の数は、五十数名にも達している。プラトン (Plato)、アリストテレス (Aristotle)、アウグスティヌス (Augustine)、トマス・アクィナス (Thomas, Aquinas) は言うまでもなく、古くはイクナトン (Ikhnaton, ca)、ヴェーダ、老子、シャンカラ (Samkara) をはじめとして、カテル (Raymond B. Cattell) まで、およそ歴史上に名を残した哲学者と学派のほとんどすべてが網羅されている。なかには、プロセス神学の創始者の一人と目されるソツツイーニ (Fausto Socinaus) のように、はじめて英訳された貴重な文献もある。そしてその一つ一つに、解説と一貫した解釈が施される。しかしこの書物の最大の特徴は、単に宗教思想が網羅されているという点にあるのではない。取り上げられた思想 (哲学者) のすべてに、万有在神論の立場から評価、判定が下され、それをもとにいくつかの神学的立場が区分されている点にある。

その名目上の区分を目次に即して列記すると、(1)古代の疑似万有在神論<ETCKW>、(2)アリストテレスの有神論<EC>、(3)古典的有神論<ECK>、(4)古典的汎神論<ECKW>、(5)発出論<E>、(6)時間的有神論<ETCK>、(7)近、現代の万有在神論<ETCKW>、(8)制限付き万有在神論<ETCKW>、(9)極端な時間的有神論<TCK>、(10)極端な時間的有神論<T>である。この区分以外に、第三部には、古代と近・現代の懐疑論ないし無神論が一括されている。

ハーツホーンは、五十数名に及ぶ哲学者の思想を以上のように区分するが、その原理となる論議

については、『哲学者たちの神』の序文に詳しく述べられている。ここではその結果だけに注目しておく。それによると、神の属性が五つの要素に分解され、その組み合わせが考えられる。その五つの属性とは、神は、永遠か (E)、時間的か (T)、意識的か (C)、世界を知るか (K)、世界を包むか (W) である。そしてこれらの組み合わせから、不合理なものを除外して取り出した型が、それぞれの区分の後にアルファベットで示したものである。最終的には、結局、ETCKW、EC、ECK、E、ECKW、ETCK、ETCK(W)、T(C)(K)、T の九つに集約される。結論は、五つの要素全てを充足する万有在神論の立場が宗教思想の在り方としては最善のものであって、それ以外のものには、何らかの要素の欠落が伴う点で不十分さが残るとされる。

このような主張には、当然次のような反論が予想される。すなわちそのような思想の型は、解釈者が資料に押しつけたものではないかとする反論である。しかしハーツホーンは、これに、このような返答を与えている。「我々はむしろ、資料に、その型（あるいは型らしいもの）を見出したのだ」と。すなわち自分は、あらゆる思想の型を見渡した上で類型化し、万有在神論の真理を敷衍したのだと。しかもこれらの思想の型にはそれぞれに知性への教訓が秘められており、自分はその教訓を生かしたのだとも言う。つまり（宗教）哲学の歴史は、哲学者たちが、それぞれの見解を披瀝する舞台であり、可能な見解や可能な論議を示唆する宝庫、真理を検証するための実験室だと見なされる。特に、真理検証の実験室という視点で思想史を眺めれば、思想史が過度の単純化の歴史であることも了解されるところ。従って、宗教思想に限れば、それは、万有在神論からの逸脱の歴史だったと断罪される。このような主張の背景には、数学、つまり形式論理への信頼がある。数学は、思考可能な種々の世界、つまりその論理的構造を考える上に不可欠だからである。

II 矛盾の論理と形式論理

一般に伝統的な神学では、逆説や矛盾の論理が強調される傾向が強い。反対の一致や絶対矛盾的自己同一を主張する神学（宗教哲学）には、とりわけそれが顕著である。

例えば、西田幾多郎は、「一体神は、普通無限なものとして考えられる、そうして神と世界の対立を有限と無限との対立と見ておる。しかし神は無限といっても、それは有限を否定した無限ではない。さなくば神の無限はいかにして世界を生み出すか、有限と無限がいかにして結び付くことができるかを解するすることはできぬ。神の無限は有限を否定したものではなく有限と無限との一致した無限である、即ち *coincidentia oppositorum*（反対の一致）である。神はすべての反対の統一である。論理的に矛盾したものを統一したものであって、両立しないものの一致を神の性質と考えた」（『西田幾多郎全集』第十四巻 *Coincidentia oppositorum* と愛）と言う。一体、有限と無限とが一致した無限とはどういう意味なのだろうか。

神に両面を認めることは確かに卓見であるし、一流の思想家たちは概して一方に偏しない立場を取ることが多いのも事実である。しかしこの両面は矛盾の論理でしか捉えられないものだろうか。この種の矛盾の論理で考えると、同時に神が悪魔的であることも認めざるをえなくなる。またこのような西田幾多郎の執拗な努力が、微妙な均衡を失い、極端な神秘主義に脱すれば、「不条理なるがゆえに信ずる」とするような信仰の逆説のみが強調されることにもなる。神の子は十字架につけられた、それは恥すべきことであるから、恥としない。神の子は死んだ、それは愚かなことである

から、まったく信ずるに値する。イエスは埋葬され復活した、これは不可能なことであるから、確かである。これでは、体験や直観、瞑想のみによる救済を強調する結果にもなりかねない。ハーツホーンは、この種の神学（宗教哲学）の伝統を一括して、矛盾なく考えられないような神は神ではないとする神学だと表現する。これは、信仰の逆説を強調する余り、人間の知恵を過小評価しすぎた神学である。たとえ愚かな知恵であっても、それを最大限に活用するのが人間の努めであろう。

伝統的な神学にも、神の性質を云々する場合には、神秘主義を生む契機となるような否定神学的素地はある。例えばトマス・アクィナスの『神学大全』第三問序文には、神に相応しくない性質を次々に神から取り除く方法で、神の性質が示されている。つまり神が何でないかを主張しながら、神から物体性や複合性、運動が否定される。そして神の単純性等の性質が導き出される。しかしトマスの場合、このような「否定の道」<via negationis>には、同時に、被造物の有限な完全性を無限な完全性にまで進めて、それを神に帰する「完成の道」<via perfectionis> が用意されていた。恩恵は自然を破壊せず、却ってこれを完成する。

アウグスティヌスにも、広い意味では、信仰と理性との緊張が保持されてきた。彼は、まず信じることを強調する一方で、しかし「すべて理解する者は信じているし、またすべて憶測する者も信じている。だが信じる者は必ずしも理解しない。憶測する者は決して理解しない」<『信の効用』第2章>と述べることも忘れない。しかしこの緊張を崩して矛盾の論理や直観、更には体験が認められると、少なくとも信仰に疑問を投げかけてきた懐疑的無神論者や実証主義者を納得させることはできなくなる。

ハーツホーンがアンセルムスの存在論的証明を改めて取り上げる背景には、神学が直観や矛盾の賞揚によって無知蒙昧な偶像崇拜に脱することを何より神の冒瀆だと信じたからである。神学は経験によって検証されたり、反証されたりするようなものではない。理性を信じるとは、神の存在ないし非存在が、理性の推論によって導き出せると信じることである。問題はむしろ、矛盾を矛盾のままに真理の本質を突いたものとして捉えるのではなく、理性をもった全ての人が、信仰の不合理さのゆえに、無神論への道に至ることのないように、またできれば、彼らをも有神論への積極的な信仰に導ける原理を模索するところにある。形式論理が強調されるのは、一つにはこのような観点からである。

宗教がある意味で心霊上の事実だとする認識においては一致する場合でも、またその結論が同じように見えても、いかなる論理を採るかによっては、当然説明の仕方にも相違が出る。ハーツホーンは、どこまでも形式論理をよりどころに理性を働かせる。なぜなら形式論理ないし数学的思考法は、全ての可能な説明を形式的に尽くし切る一つの有効な道具だからである。物理学でも、基本的には観察は単にある仮説の是非を決定するものというより、考えられる諸々の仮説（理論）のいずれを選択すべきかを決定するものと言われる。理論が理論と衝突するのであって、観察が観察と衝突するわけではない。もしそのように考えてよいのなら、まず可能な理論的説明が形式的に尽くされる必要がある。

ハーツホーンは、このような例に、ケプラー（Johannes Kepler）の惑星の楕円軌道の発見を挙げる。ケプラーは結果として、事実合う楕円軌道を理論として選択したが、その際に利用された天文学での円錐曲線論には取りうる曲線の型が尽くされていると、ハーツホーンは考える。そして確信をもってあらゆる可能な説明を尽くすには、数学や幾何学のモデルを利用するのが最適だと結

論した。

膨大なデータを前になされたケプラーのこのような執拗な理論選択の努力が、宗教や哲学においては欠落してきた。ハーツホーンの「有神論の可能性の数学」という言葉には、ケプラーが依拠した円錐曲線論が、一つのモデルとして念頭に置かれている。だからこそ考えられる可能な説明を尽くし切らない論議によって、安易に、たまたま哲学史において出くわした理論が、偏見や嗜好によって、最善の理論と見なされたりするのだとも言う。(宗教)哲学の歴史が、何よりも真理検証の実験室でなければならないとされる理由の一端は、この点にある。いかなる有神論が真であり、有意義なのかという問いは、形式的に可能性が尽くされて後の問題である。形式的に可能性を尽くせば、形式上矛盾したものについては考慮から外せるし、無視された可能性のなかにも、他のもの以上に宗教的な洞察という点から支持されるような説明が見い出される可能性も出てくる。

Ⅲ 独立性と因果性

種々の有神論の形態は、主に次の二つの問いにどう答えるかに左右されると言われる。(一)神は、神以外の諸存在の世界から独立しているか、つまりそれらの諸存在がなくても存在するか、あるいはそのようには在りえないか。(二)神は、完全な存在であるか。また完全な存在であるとすれば、それはどのような意味においてか。

以上の二つの命題に関連して、本稿では神の独立性の問題を取り上げてみよう。アウグスティヌス、アンセルムス、トマスをはじめとする古典的、正統的な有神論では、神は、独立した普遍的原因ないし源泉と考えられてきた。神が世界と独立しているということは、この世界から見れば、世界が神の外にあることを意味する。世界には、何らかの活動によって神に制限を加えたり、神の構成要素となったりできないわけである。とすれば結局、神は、独立的かつ全てを生み出す普遍的原因ではあるが、全てを包括していないことになる。また逆にストア派やスピノザのような自然即神という汎神論に立てば、神は包括的な実在とはなるが、世界は神の現実態のうちに存在することになり、世界が神の本質を制限することになる。つまり神は、世界の全体性から区別されるような究極的、普遍的な原因ではなくなり、全体から独立することもない。神は、全てを包括しはするが独立せず、おそらく自然を生み出す普遍的原因でもないと考えられる。これは、神の本質と世界とを同一視した結果である。

有神論が、この全く対立した二つの形態のいずれかしか選べないわけではない。両方とも偽であるとも考えられるし、西田幾多郎のように、この両者を同時に認めて、肯定と否定とを矛盾の論理で両立させることも可能である。ハーツホーンは、このいずれをも取らずに第三の可能性を模索した。つまり神が独立的であるという意味には、論理的には三つの可能性があると言う。(一)その全ての存在において独立的、(二)その存在のある側面では独立的、(三)いかなる側面においても独立的ではないの三つである。このうち既に(一)と(三)については既に触れた。ハーツホーンは、これに考慮から外されていた(二)の立場を付け加える。結論を先取りして言えば、これは、神は普遍的原因でありかつ全てを包括する実在であることを、形式論理の立場から論理的に両立させうる方向を求めることに他ならない。

「独立的」、「原因」、「全包括的」という一見矛盾した概念は、どのように考えれば形式論理の枠

の中に矛盾なく納めることができるだろうか。例えば「原因」という用語はどうだろうか。神学において、「原因」という言葉はどのような意味に使われてきたか。「原因」には、少なくとも次のような意味が与えられてきた。その存在がその結果としての存在—神学では神以外の全ての存在が結果と見なされる—になくなくてはならないもの、その結果としての存在によって必要とされるもの、ないしその結果としての存在から類推可能なもの、そのようなものが「原因」と見なされてきたと言う。しかし彼はこれを逆にして、結果が原因を必要とするなら、原因も結果を必要としないのかと問い掛ける。つまり被造物が神を必要とするなら、神も被造物を必要とはしないのかと。一般に伝統的な神学では、これが否定されてきた。先に触れたように、神は世界から独立して存在するものであって、世界が存在しなくても在りうる。世界は神に完全に依存するが、逆に神はまったく世界に依存していない。神は、世界とは何の関わりもなく存在し続けられる。これが、他の被造物とは区別される万物の創造者としての原因（神）の特異性、つまり全知全能の神の本性だとされた。

原因という概念から一般に期待するのは、このようなことだろうか。原因があれば、当然結果を期待するし、結果を予測しようとする。これが一般の心理であろう。しかし神の独立性を主張する伝統的な神概念では、結果に対するそのような期待や予測が存在しないように見える。なぜなら神はこの世界を創造したが、もし神が異なった世界を創造したり、まったく世界を創造しなかったにしても、神は現在在るように、結果である被造物には何の関わりもなくそのまま存在するとするのが、伝統的な神概念だからである。ハーツホーンは、この伝統的な因果性を「厳格な非対称性」<radical asymmetrical>と呼び、それを神から被造物への一方的な因果的必然性と解釈する。伝統的な神の独立性は、論理的にはこのような一方的な因果的必然性をもたらす。

しかし現代の科学では、原因は結果に関係するものとして考えるのが普通である。しかもそれは、因果的必然性としてではなく、蓋然性としてである。つまり原因が存在すれば、ある一定の変数の範囲内で、何らかの結果が必ず生起すると考えられる。更に言えば、物理学ではこの原因と結果との関係は互換可能なものと見なされている。結果が存在すれば、逆に一定の変数の範囲内で何らかの原因が必ず存在するとも言われる。

ベルクソンやホワイトヘッドの哲学では、時間がその論理構造においては非対称的であることが証明されてきたと、ハーツホーンは考える。物理的な出来事としては、このような一定方向にかつ一方的に流れる時間の構造は、熱力学のエントロピーの法則に見られる。それをそのまま時間の論理構造に置き換えると、「すべての子供が大人になるわけではないが、大人はすべて子供であった」と表現できる。そういう意味では、時間的に先行するものは決して後続するものを具体的な細部に渡って含むことはない。少なくとも、現在には、未来は蓋然的にしか含まれない。これによって、時間は一方的に過去から現在へと流れて、逆方向に流れないこと、また未来も蓋然的な予測の域を出ないことが、論理的に表現されたことになる。このような蓋然的な非対称的包含関係を、ハーツホーンは「中庸な非対称性」<moderate asymmetrical>と呼ぶ。論理的には過去は完全に現在の内に含まれるが、未来は蓋然的にしか現在の内に含まれない。これは、物理学的には、素粒子の位置は蓋然的にしか予測できないという主張に呼応する。これによって、伝統的な神と被造物との間に見られた因果的に厳格な一方的な必然性に制限を置こうとする。

一つの原因には必ず一つの結果が特定できるとするのではなく、一つの原因には特定できないが何らかの結果が必ず伴うと考えることができるなら、またそういう意味で因果関係が必然的なもの

ではなく、蓋然的なものだとすれば、このような因果関係を神と被造物との間に適用することも可能ではないか。ハーツホーンは、こうして神という原因に関しても、時間に非対称性を認めながら、その影響は蓋然的でしかないような観点を提示しようとする。つまり神の存在<existence>は、何らかの或る世界の存在を必然的なこととして要請するが、現存のこの特定の世界が存在することについては何ら必然性を要請しない。従ってこの地球という特定の世界の存在(結果)は、単に諸々の可能性の一つが偶然に実現されたにすぎない。神性は、任意の世界とは独立しているが、世界自体とは独立していないと主張する。神の原因を「至高な原因」と見なせば、その純粋ないし普遍的な原因は、他の全ての事物によって必要とされるが、自らはただ、可能な世界に何らかのものが存在することだけを必要とするのである。神は、任意の特定の世界からは独立しているが、世界そのものの存在からは独立していないと考えれば、至高な原因にとっては、とにかく世界は存在しなければならないが、それがこの世界である必要はまったくないということになる。言い換えれば、神によるこの世界の創造は、神の意志でも、恩寵でもなく、単なる偶然にすぎなくなる。もっともこの論理で考えると、偶然的な或るものが存在するという事、そのこと自体は必然的でなければならない。従って、世界からの神の独立性の問題は、古典的な有神論の一方的な独立とは異なり、次元を分けた領域で独立性と依存性が双方ともに認められる結果になる。

原因はつねに特定の結果からは独立しているし、結果はつねに特定の原因からは独立している。しかし原因には結果が伴うこと、結果には原因があること、そのこと自体からはお互いに独立していない。

いずれにせよ普遍的原因としての神、つまり他の全てのものが必要とし、あるいは依存するにもかかわらず、自らは何ものをも必要としない神というのは、確かに内容空疎な抽象概念である。これを、ハーツホーンは神の存在と呼んだが、この神は、しかし神の一面にすぎない。神が具体的かつ現実に存在するものであるためには、結果としてその働きを及ぼせるような、また世界から働きを受けるような、神以外のある不特定な具体的出来事(これ自体は抽象概念である)を必要とする。神が世界を必要とすること、そのことは必然的であるが、この現実の世界は偶然に生じたにすぎない。とすれば、偶然に生じたこの世界から神が影響を受けるとするのは、確かに先の抽象的な神の概念では受け入れることができない。この偶然の世界に影響を与えかつ受けるには、具体的に存在するそのような被造物の偶然性に左右される神の概念が必要になる。なぜなら、例えば、神が「私やあなたの存在を知る」という場合、その神の認識には、私やあなたの存在という偶然の事実が含まれるからである。この神の側面は、神を偶然的に制限するもの、ないし事実に基づいて制限するものである。これをハーツホーンは、神の現実態<actuality>と表現する。これによって、伝統的な神学における矛盾、すなわち必然的な神がいかんして偶然的な世界を知るかという様相の矛盾が解決される。伝統的な神概念は、抽象的な神の存在を表現する一つ概念であって、被造物に依存する生きた神、すなわち神の現実態を表現するものではなかった。

IV 両極性の原理

神が在るとするのは必然だが、神が現実にかんして在るかは偶然である。世界が在るとするのは必然だが、世界が現実にかんして在るかは偶然である。抽象的な神の存在と具体的な神の現実態、抽象

的な世界の存在と具体的な世界の現実態との両面から、伝統的な神学に対する新たな可能性を探ろうとする。もっともこのように神と世界に両面を認めることは、矛盾ではないかとする論議もある。ハーツホーンは、これに次のように答える。「無矛盾の法則は、どのような主語も、述語pと同時に非pを持つことはできないと、不正確に表現されてきたが、これには同じ観点ではという条件を付け加える必要があると」(邦訳『神の時間』P.245)。この論拠は、モリス・コーエン (Morris R.Cohen) が『論理学序論』において主張した両極性の原理にある。つまり「矛盾律は、同じ存在において相反する限定の共存を妨げない。ただ対立概念が保持する局面を区別するだけでよい。状況を単純化し、相対立するそのような性向のうち、一方のみによって状況を分析しようとする一般的な傾向には用心する必要がある。この両極性の原理は、探究の原理となるものであって、互いに対立する限定の必然的な共存性と相互依存性の原理として、一般化しうるのであろう。」

ハーツホーンはこのコーエンの示唆に従い、形式論理の枠内で、神と世界の問題を以下のように図式化して考える。可能性を尽くし切る一つの方法がこれによって示される。先の論述から、神の必然性を N 、神の偶然性を C 、世界の必然性を n 、世界の偶然性を c とすれば、単純な組み合わせから、形式的には次の九つの型が取り出せる。すなわち NC/nc 、 NC/n 、 NC/c 、 N/nc 、 N/n 、 N/c 、 C/nc 、 C/n 、 C/c である。このうち歴史的に重要な神学上の立場は次の六つであると言う。

(一) NC/nc 、ハーツホーン並びにプロセス神学の立場。

(二) N/n 、ストア哲学とスピノザの立場。

(三) N/c 、中世神学の立場。

(四) N/nc 、アリストテレスの立場。

(五) NC/c 、ソツィーニとルキエ (Jules Lequier) の立場。

(六) C/c 、ミル (John Stuart Mill)、ウイリアム・ジェームズ (William James)、ジョン・ヒツクの立場である。この区分を踏まえて、有神論と汎神論に対するハーツホーンの評価を整理しておかなければならない。

これまでの図式で整理すれば、有神論は、神と世界の関係では N/c 、神の五つの属性の組み合わせでは EC, ECK, E に相当する。また汎神論は、同様に、 $N/n, ECKW$ となる。有神論では、必然的な神が偶然的世界を知るという様相の矛盾、つまり T (ないし C) 的要素の欠如がある。また汎神論 N/n では、神と世界との独立性が全くいかなる点においても消失している。このことを神の概念から見れば、次のようになる。神の普遍的原因を C 、神の全一包括性を W とすれば、神は、

(一) 普遍的原因 (全体としてであろうと、その一つの側面においてのみであろうと)、つまり C である。

(二) 神は、全てを包括する実在、いかなる側面においても独立的ではない、つまり W である。

(三) 神は、普遍的原因であり、かつ全てを包括するもの、つまり CW である、のいずれかになる。

(一)の括弧内の後者の条件—その一つの側面においてのみ—を除外すれば、(一)と(二)は完全に矛盾する。完全に独立した原因が、同時に全体の実在に依存することはできない。包含関係とは、依存関係に他ならないからである。とすれば、このままでは当然、(三)も、自己矛盾となる。このことがあるために、伝統的な神学は基本的には、(一)か(二)の二者択一的選択に終始したのである。

確かに、有神論が、神は単に全ての事物から独立した原因であるという意味にすぎないのなら、また汎神論が、単に全一包括的な神の存在を主張するだけなら、つまり神の抽象的側面と具体的側面とを別々に捉えれば、その限りにおいて両者はともに真である。しかしこれは、二つの神が存在しうるということではない。一つの神が独立した本質と依存的な偶有性との両面を持ちうるという意味である。例えば、それは人間が比較的固定された、融通のきかない性質と、絶えず変化に即応する現実の経験との両面を持っていることに比肩される。たとえいかなる特定の世界が存在しなくても、あるいは存在しても、神の抽象的な側面であるその本質（存在）はそのままに存在すると言える。また神は自らの存在のなかに全ての結果を包括しとする。しかし古典的有神論は、前者のことから、神は全く同じ状態で存在すると、つまり存在と状態、本質と偶有性との間には、可能な区別がないと主張した。一方、汎神論は、後者のことから、神の現実態には別の在り方ができなかったとして、いかなる偶有性、偶然性も認めなかった。

しかし無視された(一)の括弧内の後者の条件を考慮すれば、神は、全てから独立した普遍的原因であるだけでなく、一面では、全てを包括する存在、つまり諸結果の総体でもあると見ることができ、神は、その存在のある側面では、すなわち抽象的、必然的な側面では全く独立的であるが、具体的、偶然的な側面で全く依存的なのである。前者は、神の抽象的な存在の側面、後者は神の現実態としての側面を示している。(三)の自己矛盾は、神にこの両面性を認めることによって、矛盾の論理としてではなく両立性の原理として、形式論理的に両立される。この条件を補ってはじめて、CW という神の定義が真に生かされる。その意図は、C によって古典的有神論の利点を、また W によって古典的汎神論の利点を、それぞれに体系のなかに矛盾なく取り込むところにある。このような立場が、ハーツホーンの言う万有在神論である。

V 神の時間性と全知全能

神に二面性を認めたことによって、万有在神論は、ETCKW の各要素を漏れなく包括するだけでなく、神と世界のそれぞれに偶然性を認める NC/nc の両要素を均等に保持する有神論となる。これは、形式論理によって概念の明晰化が図られたこと、および可能性が尽くされたことから結果した一つの結論でもある。この両者の定義に特徴的なのは、それぞれに、時間的要因を示す T (ないし C) が含まれている点である。論理的真理に時間的要因を組み込むことは、単なる論理的存在としての可能性や必然性を超えて、特殊な様相論理を認めることでもある。

しかし、これを認めて、神をそのような存在のカテゴリーの至高な典型例とする形而上学を体系化するためには、時間ないし生成が事実の偶然性として認められる必要がある。カテゴリーの至高な事例としての神にそれが認められるとすれば、当然全ての被造物にも認められなければならない。論理的には、定項 x と変項 y との結合体 xy は、変項と見なされる。しかも時間は一方向的なものでなければならない。つまり原因は常に結果に先んじて存在しうるものでなければならない。依存関係を包含関係と見れば、これは、先行のものは決して後続のものを個々の細目にわたって包含しないにもかかわらず、後続のものは先行のものを必然的に包含するという意味に解される。未来がどうあれ、この現在には相違はないが、過去がどうあったかによって、この現在には相違が生じる。

論理的真理にこのような時間論を加味すれば、伝統的な神の全知全能の概念にも、一定の制約が付される。神の認識が被造物の偶然性に左右されたものだとすれば、神の認識は、実在するものを在るがままに、つまり過去のもは過去のものとして、現在のもは現在のものとして、未来のもは未来のものとして、捉えることしかできなくなる。そういう意味では、神にでも、既に落ち着いた事実を変えられないし、未だ落ち着いた未来を落ち着いた事実と捉えることもできない。我々の明日の行動は、神にも充分には知りえない。現在とは、神と被造物とが織り成す創造の場に他ならない。これによって、「我々はお互いに肢体なのである」という聖書の言葉が、真に生きたものにされる。単に純粹な知性や意志によって、我々被造物の感じを知り、その善を望むだけでは不十分である。我々の感じを感じ取り、我々の喜びや苦しみに応えるものでなければならない。神に対する世界の働きかけを受けるような神でなければならない。こうして、神の一面を「理解を共にする苦悩の同伴者」と捉えたホワイトヘッドの神学は、神の偶然性を強調したハーツホーンの神学に結実される。

伝統的な神学では、神は世界から完全に独立するか、また完全に世界に埋没するかのいずれかであった。しかし世界から完全に独立した神には、被造物に真なる愛情は持てないし、また世界に埋没した神では、そもそも世界に対する愛情が無意味になる。神は一面では独立していながら、一面では依存している。そのような両面性を認めてこそ、単に偶然的な存在にすぎない我々人間に生きる力が与えられるのである。人間の自由はこうして神との共存が許される。しかしこれは、悪の存在も同時に神に責任を転嫁することなく、悲劇のまま認めることを意味する。

[1996年12月10日受理]